

タカナの高品質多収生産技術の開発

～施肥量を増やして収量増加～

1. はじめに

和歌山県でタカナは、紀南地域を中心に約5ha栽培されている。郷土料理「めはりずし」の材料として、主に東牟婁地域で栽培されてきたが、近年では、西牟婁地域でも栽培が行われている。しかし、西牟婁地域では栽培方法が確立されていないため収量が少ない。そこで、栽培方法の改善による安定した収量確保を目指し、代表的な品種を用いて施肥量の検討を行った。

2. 試験方法

タカナは‘三池高菜’、‘青ちりめん高菜’、‘柳川大縮緬高菜’の3品種を供試し、2013年9月10日に播種、10月1日に畝幅120cm、株間40cm、2条植え（マルチ栽培）で農業試験場において定植した。

施肥量は、①無肥料、②慣行、③肥料1.5倍、④肥料2倍の4試験区（1区10.8㎡）を設定し（表1）、12月26日に収量を調査した。

3. 結果

3品種ともに施肥量を増やすと収量が増加する傾向にあった（表2）。

栽培後の土壤理化学性は、pHやECに変化はないものの、可給態リン酸量や交換性カリの量は、施肥量に応じて増加する傾向がみられた（表3）。

4. おわりに

今回、密植にし、マルチ栽培での施肥試験を行ったところ、慣行の施肥量より多く施肥することで増収した。栽培跡地土壌でのECも低いことから、タカナは吸肥性が高く、収量を確保するには多肥条件での栽培が適していると考えられた。

このため、増収と肥料の有効活用からマルチは必要と考えられるが、収益性との関連を考慮しながら、安定生産が可能で、省力的かつ地域に適した栽培方法を確立したい。

（環境部 林恭平）

表1 各試験区の基肥施用量

試験区	化学肥料施用量(kg/10a)		
	窒素	リン酸	カリ
①無施肥	0	0	0
②慣行	30	34	29
③肥料1.5倍	45	50	43
④肥料2倍	60	67	58

注) 全量基肥施用

表2 施肥量がタカナの収量に及ぼす影響

品種	試験区	株重(kg/株)	収量(t/10a)
	②慣行	1.69	7.06
	③肥料1.5倍	1.83	7.64
	④肥料2倍	1.81	7.54
青ちりめん高菜	①無施肥	0.97	4.02
	②慣行	1.33	5.55
	③肥料1.5倍	1.57	6.54
	④肥料2倍	1.77	7.36
柳川大縮緬高菜	①無施肥	1.38	5.77
	②慣行	1.94	8.09
	③肥料1.5倍	1.86	7.73
	④肥料2倍	2.24	9.32

表3 栽培前後の土壤理化学性

試験区	pH (H ₂ O)	EC (mS/cm)	可給態リン酸 (mg/100g)	交換性塩基(mg/100g)			腐植 (%)
				石灰	苦土	カリ	
栽培前	6.88	0.05	75	184	35	20	2.4
①無施肥	6.97	0.05	88	181	39	19	2.2
栽培後	6.82	0.06	97	194	37	21	2.3
③肥料1.5倍	6.80	0.06	93	180	32	26	2.5
④肥料2倍	6.97	0.06	110	208	34	30	2.4